

⑤ 「鍼灸臨床文献学会」

鍼灸の治効を探るには古来の治療法の探究が重要との趣意に立つ。(H5・3・16・11) 座長・口演を担当。H15・11、第一一回には、満九〇才記念講演「脾臓の歴史」を行なう。

⑥ 「東洋鍼灸医学大講演会」

特に(H16・11・28) 第二部鍼灸臨床セミナー「伝統に根ざしたもう一つの医学」における講義・実技公開におけるフランス思想と古典とが結合したものを評価し、「今後の鍼灸の行方を示すもの」と特記された。

以上、教育者としての経歴過程における執念・求道者のごとき学会参加の姿勢と成果の公表について記し、著者の斯界に対する磐石の態度を表現した。終りに著者の言を掲げる。「現代医療に、旧来の医療を加えるということは、旧来の医療が身体全体の調整をはかるという意味で、必要である。これまででは陰で行われていたことが、表立って並行することが、治療効果を上げる上で必要である。

鍼灸は自律神経の調整を主として、心身の調和をはかるものであり、高度先進医療の基礎となるべきものと考える。」と。多くの方々の閲読を期待する。

(末中 哲夫)

〔思文閣出版、二〇〇五・八・四発行。二〇〇〇円・税別〕

近藤 均 著

『医療人間学のトリニティー 哲学・史学・文学』

本書は「医療とその周辺領域に幅広い関心を持たれている一般の方々」や、「医療系大学の人文系教養教育」の現場で用いられることを意図したものである。「はしがき」によれば、医療人間学とは「メデイカルな諸問題をヒューマニティーズの手法によつて探究」する学問のことであり、トリニティーとは「三つで一組となつているもの」、ここでは「ヒューマニティーズの最も重要な三本柱」である「哲学・史学・文学」をさし、この「三つの分野を有機的に統合」して構築した医療人間学である、というのがタイトルの意味となつている。

そのトリニティーの展開としては、「文学作品の一節を素材にして医療の諸相を具体的に把握し(文学)、当該問題に関する社会的背景を歴史的脈絡の中で捉える(史学)とともに、そこから現代にも通じる哲学・倫理学事項を汲み取つて批判的に吟味し(哲学)、ひいては医療の将来展望を実践的に切り拓くこと」をめざすとなつていて、著述のキーワードは「いのち」および「いのちの尊さ」とある。

素材として取り上げられた文学作品は三編に及んでいる。以下、主題に関して簡単にふれておくと、第一章森鷗外の「カズイスタカ」では漢方医学から西洋医学への移行期の問題を、第二章泉鏡花の「外科室」では麻酔薬の開発と外科医療の進展

を踏まえながら、その時代の医療倫理の問題を、第三章樋口一葉の『うつせみ』では精神病の問題を、第四章国木田独歩の『春の鳥』では障害児教育を、第五章田山花袋の『二兵卒』では国民病の脚氣を、第六章伊藤左千夫の『奈々子』では二人称の死となっている事故死を、第七章石川啄木の『赤痢』では伝染病への対応を、第八章高浜虚子の『続俳諧師—文太郎の死』では医療におけるパターナリズムを、第九章夏目漱石の『思い出す事など』では臨死体験について、第一〇章谷崎潤一郎の『異端者の悲しみ』では正常と異常、正統と異端について、第一一章有島武郎の『実験室』では病理学者を通して科学のあり方を問題にし、第一二章志賀直哉の『流行感冒』ではスペイン風邪を、第一三章島崎藤村の『ある女の生涯』では性病をとりまく問題を、第一四章葉山嘉樹の『海に生くる人々』では医療費負担の問題を、第一五章横光利一の『花園の思想』では妻の死を看取る夫の心理を取り上げる。

第一六章平林たい子の『施療室にて』では学用患者の問題を、第一七章山本有三の『波』では親子鑑定の問題を、第一八章佐藤春夫の『陳述被告一之瀬医学士陳述の一部』では大法院の医局制の問題を、第一九章梶井基次郎の『のんきな患者』では結核患者とその治療をめぐる、第二〇章北條民雄の『いのちの初夜』ではハンセン病患者の苦悩と苦難の歩みを、第二一章壺井栄の『大根の葉』では視力障害者とその母親の心情を、第二二章太宰治の『皮膚と心』では皮膚の病変にともなう心の揺れを、第二三章中山義秀の『テニヤンの

末日』では軍医のヒューマニズムと人体実験について、第二四章原民喜の『夏の花』では原爆症を、第二五章井伏鱒二の『本日休診』では戦後の周産期医療や妊娠中絶を、第二六章川端康成の『川のある下町の話』では生活保護法における医療扶助の問題を、第二七章大江健三郎の『他人の足』では難病患者の生活と心の動きをめぐる、第二八章室生犀星の『われはうたえどもやぶれかぶれ』ではガン治療と告知の問題を、第二九章石牟礼道子の『苦海浄土 わが水俣病』では水俣病患者の苦悩を、第三〇章有吉佐和子の『恍惚の人』では認知症老人の介護の問題を、第三一章村上龍の『限りなく透明に近いブルー』では薬物依存症の問題を、第三二章加賀乙彦の『宣告』では死刑囚の拘禁ノイローゼの問題を、それぞれ主題にして著作年代の政治状況や作品の文学史的な解説、主題の背景をなす医学・医療史や倫理問題の解説がなされている。

たいへん大部な労作であり、読み終えるのに時間を要したが、率直にいえば「文学作品事典を読み終えた」という印象が強い。それは主題周辺の知識・情報を事典・辞書的に整理し、あれもこれもといった感じで盛り込まれているところから来ている。そのためキーワードとなっている「いのちの尊さ」が見えにくくなったくらいがある。「考えさせるための教材」とするには、もっと知識・情報を絞り込み、現代につながる倫理的な問題の所在を鋭角に浮かび上がらせる構成をとってほしかった。

なお、解説的な記述において、「日本で最初に設立された精

神病院は一八七九年の東京府(一五〇頁)となつてゐるが、京都の癲狂院はそれよりも早く一八七五年の設立であり、また「病院の典型といへば国立あるいは公立の医学校に併設されたもの」(三二五頁)とあるが、日本では多くが病院付属医学校にはじまつて、のちに医学校付属病院となつたのであり、また「神山(かみやま) 復生病院」(三四八頁)は「こうやま」の訓みが正しい。

(新村 拓)

〔太陽出版、東京都文京区本郷四一―一四、電話〇三(三八一四)〇四七一、二〇〇五年二月、A五版、六三八頁、本体価格四八〇〇円〕

安藤 優一郎 著

『江戸の養生所』

本書は、山本周五郎『赤ひげ診療譚』や黒澤明の映画『赤ひげ』などで知られている小石川養生所を取り上げた新書判の本としてきわめて興味ある内容を示している。それは、新書判というサイズと分量の中で、養生所の成立から終焉までを実に多面的に論じているからである。

本書の構成を示すと、「プロローグ 江戸の養生」(第一章 大都会・江戸の医療事情)「第二章 町奉行大岡忠相と小石川養生所」(第三章 養生所の入所生活)「第四章 寛政の医

療改革」(第五章 養生所の病巢)「第六章 養生所改革の挫折」(エピローグ 養生所の終焉)となつてゐる。「プロローグ 江戸の養生」では、養生所設立の背景としての江戸の養生文化の概要を略述する。第一章では、江戸の医療事情が決して劣悪な状態ではなかつたこと、養生書をはじめとする医療情報が氾濫してゐたといった指摘がなされてゐる。これらの指摘はもちろん正鵠を射ている面もあるが、一方で概括的に過ぎる記述もいくぶんか見受けられる。第二章では、小川箒船による目安箱への上書を契機として、小石川御薬園内に施薬院が設けられ、それが「養生所」として治療を行つていく経緯が論述されている。この章と次章「養生所の入所生活」では、一次史料に丹念にあたり、設立当初の養生所の全容を伝えることに成功している。また、代々養生所の肝煎を務めた小川家についても筆が割かれており、評者も学ぶところが多かつた。

第四章、第五章、第六章では、江戸後期以降の養生所の変遷、それは運営難と改革の挫折の連続とでもいふべき苦悩の時代といえるものであるが、そうした養生所における内外の課題との格闘のさまを描き出している。そこで筆者が触れている点で興味深いことは、寛政以降に養生所の入所者が減つていく理由を、寛政改革によつて設けられた町会所による救民活動とのバランスの關係でみている視点である。すなわち、町会所による救民活動はいわば生活扶助であり、養生所における治療とは異なり、庶民の生活危機を総体的に救済できる